



シリーズ

TACという懸け橋

Vol.

5

「買ってくれる人」がいるからこそ、農業を続けることができる。生産者と手を携えながら、消費者とのさらなる結びつきを求め、日々奮闘するTACの姿を追う。

☐ 福岡県 JAにじ／JA全農ふくれん

☐ 新潟県 JA胎内市／JA全農にいがた

☐ 静岡県 JAとびあ浜松／静岡県JA営農センター

☐ 滋賀県 JA北びわこ／JA全農しが

☒ 愛媛県 JA西条／JA全農えひめ

☐ 宮城県 JAあさひな／JA全農みやぎ

☐ 岩手県 JA新いわて／JA全農いわて


JA西条 里芋部会長 盛實武志
(左) JA西条 黒川直樹(右)㊤

「担い手のサポーター」として日々精を出す㊤

県域で産地化を目指すサトイモ・伊予美人㊤

先進地で栽培方法を学ぶ

JA西条は、JA全農えひめと連携しながら、サトイモの新ブランド「伊予美人」の生産・販売に注力している。

JA西条はもともと水稻や裸麦を中心に栽培する水田地帯であるが、担い手からは安定した所得向上が見込める新規作物の提案を求められていた。そこで目つけたのが、県域でブランド化を進めていた「伊予美人」だった。従来の品種に比べ収量が多く、秀品率も高い。肉質が柔らかで、粘りや旨みが強く、どんな料理にでも合わせることができる。

JA西条のTAC・黒川直樹は、栽培技術・体系を自ら学び担い手に伝えるため、県内の先進地・JAうまに何度も足を運んだ。黒川は言う。「百聞は一見にしかず、百見は一触にしかず。自分の手を実際に動かしてみないことには何も始まりません」。

担い手とともに先進地での研修会にも参加、管内の圃場に先進地の営農指導員を招き指導を仰いだ。JAの枠を超えた担い手同士の連携や交流も図られるようになった。TAC同士のつながりから、近隣JAの選果場施設が共同で利用できるようになり、省力化にも貢献した。

いままで取り組んだことのない作物だったからこそ「実

績を積み上げていく」手応えがあった。成果は数字にもあらわれた。平成23年度、6人のメンバーで研究会が発足。平成24年には部会となり、平成25年には28人に増員した。栽培面積も150aから410aへと、大幅に拡大した。

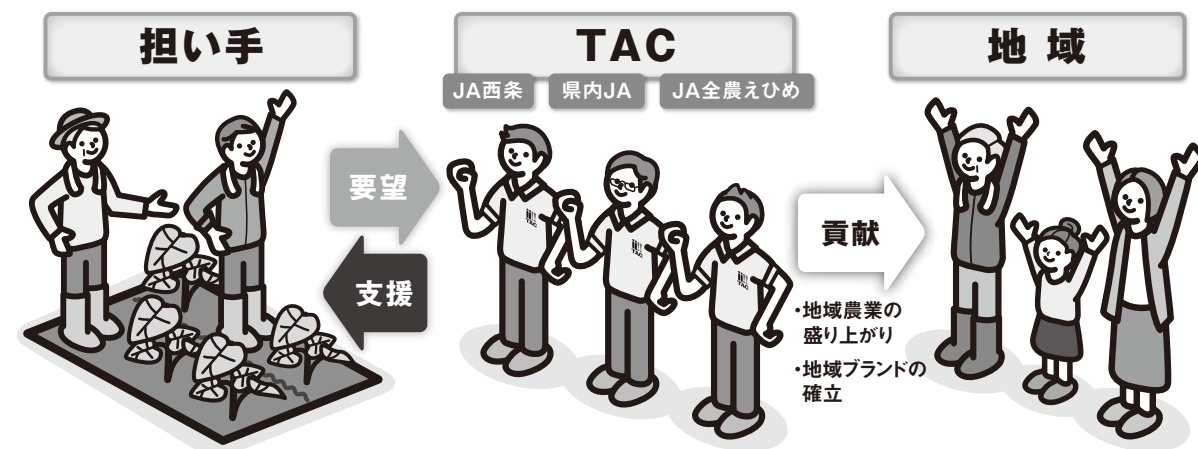
JA全農えひめ・県内JAと共同で、マーケティング調査も実施。消費者の嗜好を調べ、結果を担い手にフィードバックするなど、品質向上・知名度向上にも取り組む。また、食育の一環として、親子のサトイモ掘り取り体験会を開催するなど、積極的に活動を展開する。

こうした取り組みは、管内の他の作物にも波及し、地域農業全体を盛り上げる起爆剤となっている。

「サトイモのことは黒川に聞け」

地域の中でもいち早くサトイモ栽培に着手した盛實武志は黒川を高く評価する。「彼は勉強熱心だ。サトイモに関して教えてもらうこともたくさんある」。黒川も期待に応えようと努力する。「『サトイモのことなら黒川に聞け』と言われるまでになりたい」。

営農の分野は奥が深い。だからこそTACは担い手とともに考え、取り組んでいかなくてはならない。「TACは、担い手の心を支えるサポーターです」。黒川はきっぱりと口にした。



第8回JAグループ
国産農畜産物商談会

2014年3月12日(水)10:00～17:00／13日(木)10:00～16:00
東京国際フォーラム展示ホール ㊤ JA全農／JAバンク／JA全中



TAC (タック) とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276
www.zennoh.or.jp

全農